
クリスマスを二つ

佐倉弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスを二つ

【Nコード】

N6105D

【作者名】

佐倉弥生

【あらすじ】

クリスマスのなくなつた世界。人々は荒れ、子どもたちは夢をなくす。こんな世界はおかしい！一人の少年がクリスマスを取り戻す旅にでる……

プロローグ

12月。

静かに雪が降っていた。

街は様々な光に満ちあふれている。

どこからかクリスマスソングが流れてくる。

知らず知らずハミングするものもいる。

恋人たちは互いの手を握りしめる。

大人たちはたくさんのプレゼントを持って足早に家路につく。

子どもたちは靴下を暖炉の前に吊るし、胸を高鳴らせている。

誰もが笑顔に満ちている。

教会では静かに祈りが捧げられる。

儼かな時間が過ぎていく。

鐘が鳴る。

その音は町中に聖夜の訪れを知らせる。

希望に満ちた日。

誰もが口々に言う。

メリークリスマス！

あたたかな心が町中に広がる。

しんしんと雪は降り続ける。

街の上に。人々の上に。

第一章 夢

サンタクロースは夢を見ていた。温かい暖炉のそばで、揺り椅子に座って。暖炉の火がぱちぱちとはせる。

「メリークリスマス！」

トナカイのジャックとダニエルは外でじゃれていた。

サンタクロースを見つけると、二頭はこう言った。

「いい加減寒いんだけど、」

「暖炉にあたらせてよ。」

「まあまあ」

サンタクロースは二匹をなだめる。

「これから仕事じゃ。今年の担当区域は・・・」

「またイギリス辺りがいいね。」

「フィッシュアンドチップスはもう飽きたよ！」

二頭は騒ぎ立てる。

「今年は、おお、久しぶりにノルウェーじゃな。」

「近いね、」

「早く帰れるぞ！」

「こりゃこりゃ。わたたちの仕事はなんじゃ？」

「夢を届けること！」

「わかっているじゃないか。年に一度しか子どもたちには会えないんじゃない。早く帰れる、なんて喜んでるようじゃトナカイとしては失格じゃよ、な、ダニエル？」

「でも。」

「家で過ごすのが一番、と言いたいんじゃない？」

「その通り。」

「そんな気持ちも一緒に届けるのがわしらの仕事。さあ、プレゼントを乗せるぞ！心待ちにしてくる子どもたちのために！出発じゃ！ハウハウハウ！」

暖炉の薪が折れた。その音に驚き、サンタクロースは目を覚ました。そして辺りを見回した。

12月24日。

プレゼントで埋め尽くされているはずの部屋には、なにも、なかった。

サラは夢を見ていた。夫のカルロスは隣でいつものように眠っている。窓の外では星が瞬いていた。

「お母さんありがとう！」

「違うわ、サラ。これはサンタクロースがくれたのよ。」

「だって、昨日お母さんを見たの。」

「ほんとう？」

「夜中、眠れなかったの。だから、一生懸命寝ようとしたの。目だけはつぶっていたの。そしたらだんだん眠くなって来て．．．そのとき足音がしたの。だから、もしかしたらサンタさんかな？そう思って少しだけ目を開けたの。サンタさんなら、ありがとうって言いたくて。でもその足はサンタさんのじゃなくて、お母さんだった．．．」

サラの母、イサベルは少し困った顔をした。そしてサラを抱き寄せた。

「サラ、なぜお母さんの足だと思ったの？」

「お母さんの足だったもの。」

イサベルはサラの頬にそっとキスをした。

「サラ、もしお母さんだったとしても、それはサンタクロースがいないということにはならないわ。私は今でも信じてるわ。サンタクロースはいるってこと。それは、優しさから生まれる心のこと。だから私もサンタクロースなの。あなたが見たのはサンタクロースだったのよ。」

イサベルはそういつてサラをベッドに寝かした。
サラの頭を優しく、優しくなでながら……

サラはカルロスのいびきで目が覚めた。そして窓の外を見つめて
いった。

「ばからしい夢。クリスマスなんて過去の遺物だわ。」
空には一筋の流れ星が飛んでいった。

ヨアキムは部屋で丸まって寝ていた。ノートにはバカ、と大きな
落書きがある。類にはまだ涙の筋がうつすらと残っている。ヨアキ
ムは隣にある小さなウサギのぬいぐるみを抱きしめていた。

「お母さん……」

ヨアキムは小さな声を出した。幼い頃の思い出が夢の中に表れる
……

「お母さん、お母さんが小さい頃はどんなことをしていたの？」

「そうねえ、氷河の模型を作っていたかな。」

「ひょうつが？」

「ひょうが。」

「なんで？」

「なぜ作るのか、って事？うーん、好きだったから、かな。」

ヨアキムの母は地理の教師をしていた。幼いヨアキムにはまだ母
の言うその意味の全てを理解しているわけではなかったが、母の話
を愛していた。その話を聞くだけでヨアキムは、まるで自分がその
国や地域に旅行したような気分になっていた。

ある日ヨアキムの母は彼を膝に乗せて絵本を読み聞かせていた。

『お母さんはサンタクロース』という本だった。それは美しい絵本
だった。だが、ヨアキムはサンタクロースを知らない。ヨアキムは、
クリスマスの廃止された年よりもずっと後に生まれたからだ。ヨア
キムは母に尋ねた。

「『サンタークロス』ってなに？」

「『サンタークロス』はね、トナカイにそりを引かせて、子どもたちをプレゼントと夢を配るの。赤い服を来た、ふとつちよのおじいさん、と言われているけれど、実際はどうなのかな。」

「僕のところにもくる？」

「ヨアキムの母は少し寂しそうな顔をした。だが、すぐに、言った。『くるよ。今日、いい子にしていたら、ヨアキムのところにもくる。』」

「次の日、ヨアキムのもとにサンタクロースは来なかった。そして、ヨアキムの母も、ヨアキムと二度と会うことはなかった。」

「ヨアキムは、母亡き後、母の思い出を必死で求めた。ヨアキムの父、エドヴァルドはそんなヨアキムを静かに見守っていた。いや、何と息子に声をかけたらいいかわからなかった。だからそつと見守るしかなかったのだ。彼自身も愛する妻を失った思いに心を砕かれていた。」

「ソフィ……」

父と息子はそれぞれの思いを胸に秘め、日々を過ごしていた。

「ヨアキムは母の影を追い求め、主を失った机に座り続けた。泣き疲れたヨアキムは机に突っ伏していた顔を上げ、部屋を歩き回った。母、ソフィは教師だけあって、たくさんの蔵書を抱えていた。それは授業で使うものもあり、また趣味のためのものもあった。ヨアキムはふと一つの棚に目が行った。それはヨアキムの背よりも高い場所にあったが、一冊だけ、飛び出していたのでヨアキムの目にとまったのだ。綺麗に整頓されている棚の中で一冊だけ飛び出たそれは、絵本だった。ヨアキムはタイトルを読んだ。」

「お母さんはサンタクロース」

「ヨアキムの目に見る見るうちに涙がたまっていた。それはヨア

キムが母と最後に一緒に読んだ本だった。ヨアキムはそれをとろうとした。だがヨアキムの背では届かない。ヨアキムは椅子を持って来て、つま先立ちになってその本を引き抜いた。引き抜いた拍子にたくさんの本がヨアキムの上になだれ落ちて来た。驚いたヨアキムはバランスを崩し、椅子から落ちた。大した高さではなかったが、ヨアキムは仰向けに床の上に転がった。その尋常ではない音に驚き、エドヴァルドがあわててやって来た。エドヴァルドは本に埋もれて床に倒れている息子を見て、とっさに抱き上げた。

ヨアキムは少しあざがついただけで、大きな怪我はしていなかった。エドヴァルドはヨアキムに尋ねた。

「なにがおこったんだ？」

ヨアキムは掴んでいた本を父に差し出した。

「この本．．．．．お母さんが最後に読んでくれた本なの。だから、読みたかったの。お母さんのこと、思い出してたの。それで、とろうと思って、引っぱったら、本がたくさん落ちてきたの．．．．．」

エドヴァルドは差し出された本を見た。そして言った。

「ヨアキム。この本は、お母さんが書いた本なんだよ。」

ヨアキムは目を見開いた。

「知らなかっただろう。よく見てごらん、この主人公の男の子、ヨアキムの顔なんだよ。世界に一冊しかないこの本は、お母さんが高校生の頃に作った話が元になってるんだそうだよ。いつか自分に子どもが生まれたら、クリスマスにあげたいと思って、ね。気が早いね。でもその年、クリスマスがなくなった。それまで街中に溢れていたクリスマスやサンタクロースの本も、飾りも、何もかもが廃止された。それでもお母さんは自分で作った話をずっと大事にして、ヨアキムが生まれたあと、自分で本にした。夢を失わないように。そう願って。クリスマスはなくなった。でもその心だけは持っていて欲しい。お母さんはヨアキムを本当に大切に思っていたんだよ。」

エドヴァルドは涙を拭いた。ヨアキムは父を見て、涙を拭いた。

「なんでクリスマスはなくなったの？」

エドヴァルドは顔をこわばらせた。

「なぜだろう。昔の悪い習慣だ、とされたらしい。だから今どこの国でも、クリスマスはやっていない。元々それ自体がない国もあるのだけど、なぜ廃止になったのかはわからない。そうなってるから、皆の心が荒れたように感じるのはお父さんだけかな。戻って来て欲しいと、お父さんは思うよ。」

「じゃあ、戻す！」

エドヴァルドはヨアキムを抱きしめたまま言った。

「ヨアキムだけじゃ、無理だよ。」

「なんで？ヨアキムが弱いから？」

「違うよ、ヨアキムは弱くない。さあ、ヨアキム、もうこの話はやめだ。もうすぐご飯だ。この散らかった本はお父さんが片付けるから、ご飯の手伝いをしてくれるかな。」

「うん……。」

ヨアキムは母の本を抱きしめたままエドヴァルドのあとをついていった。

クリスマス。その響きはヨアキムをどこか不思議な気持ちにさせた。あとで調べてみよう。ヨアキムは密かに誓った。

次の日は学校が早く終わった。ヨアキムは図書館に行き、クリスマスとサンタクロースのことを調べようとしたりした。だが、図書館にはそれに関する本はなかった。ヨアキムはがっかりして家に戻った。そして母の部屋に行った。ヨアキムは大きくバカと書かれたノートを取り出した。

このノートはヨアキムが気になったことを調べて、メモしておくノートだ。

それは時には突飛なものもあり、せつせと書いているヨアキムを何人かのクラスメートたちはからかった。

「かーちゃんなしのヨアキムは、泣きべそかいてノート書く。」

ヨアキムがその度に怒って反抗するものだから、クラスメートたちはおもしろがってますますヨアキムをからかう。ヨアキムはある日そのうちの一人をノートで殴った。ノートの角で叩かれた子は泣いてヨアキムにつかみかかった。その拍子にノートは宙を舞った。そしてリーダー格の子の目の前に落ちた。ヨアキムは急いでノートを取り返そうとしたが、一步遅く、ノートは取られてしまった。リーダー格の子はノートを破ろうとした。

しかしふと思いついたのか、にやりと笑ってペンを取り出した。そしてノートに大きく字を書いた。ヨアキムは涙がこみ上げて来た。その時、クラス誰かが先生を呼んで来たようで、それに気付いたリーダー格の子はノートをヨアキムの元に放った。

戻って来たノートの表紙には黒く太い大きな字でバカと書かれていた。その日ヨアキムは泣きながら帰り、食事中ずっと黙っていた。それに気付いたエドヴァルドはヨアキムに優しく尋ねた。ヨアキムは言うまいとしたが、悲しみの方が勝り、悲しく悔しい出来事を話した。エドヴァルドは相手に抗議しようとしたが、ヨアキムはそれを止めた。「大丈夫」といつて。

エドヴァルドはこのノートをヨアキムがどれだけ大事にしているかを知っていた。このノートは母ソフィが日本に行った時に買った来たものだった。ソフィはその豊富な文房具をずいぶん気に入ったようで、たくさん買ってきてヨアキムとエドヴァルドに渡した。

「日本の主流はB5なの！」

「このレターセット素敵でしょ？」

ヨアキムとエドヴァルドはソフィの話笑笑聞いていた。

そんな思い出のあるものだからヨアキムは大事にしていたのだ。

ヨアキムは母の部屋に行き、クリスマスとサンタクロースについての本を探し始めた。しかし、それに関する本はなく、ヨアキムはノートを閉じた。がっかりして、ヨアキムは母の絵本を開いた。思い出が蘇る。そして最後のページを開いたとき、ヨアキムは紙が挟

まっていることに気付いた。ヨアキムはそれをそつと開いた。
それはヨアキムにあてたものだった。

「ヨアキムへ」

これを見つけたということはどういうことでしょうか？お母さんの話に興味をもったのかな？

クリスマスを知りたければ、サンタクロースに聞くのが一番の方法だと思う。

サンタクロースって何？そんなことは思わないよね。

この手紙を読んでいるって言うことはつまりサンタクロースが来たあとのはずだもの。

お母さんの小さい頃にはクリスマスがあった。それはそれは素敵なイベントだった。お母さんはそれをヨアキムに知って欲しくて。もしもつと知りたいと思ったら、この住所に行ってください。ここのおじいさんはきっとヨアキムの好奇心を満たしてくれるはず。

ブレイダフロレ通り リュスナン51

ヨアキムを大好きなおかあさん ソフィ・ハルデン」

それは母がおそらくクリスマスの後、ヨアキムが読むであろうことを想定して書かれたものだった。ヨアキムにプレゼントを渡した後、何かヒントになるものを一緒においてこの手紙を見つけさせようとしたに違いない。

ヨアキムは最後に書かれた住所をノートにメモした。そして書きながら思った。この住所はうちの三件隣じゃないか！しかも変人だとか、ぼけただとか、学校に通うどの子も知っているおじいちゃんの家。ヨアキムは迷った。なんでお母さんはあの変なおじいちゃんのところに行け、なんて言うんだらう。でも、お母さんが言うことなんだから、多分……大丈夫。とりあえず明日行こう。もうすぐお父さんが帰ってくる。

その夜、ヨアキムは母と遊んだ夢を見た。

学校から帰るとヨアキムは母の手紙に書かれた住所へ向かった。呼び鈴を鳴らそうとしたが、今ひとつ勇気がでない。しばらくうろろしていたが、遂に呼び鈴を押しした。しかし誰もでてくる気配がない。もう一度ヨアキムは呼び鈴を押しした。やはり何の変化もない。ヨアキムはがっかりして、歩いていった。

すると後ろで扉が開く音がした。ヨアキムが振り返ると、白髪にひげを蓄えた、やせたおじいさんがこちらを見ていた。ヨアキムはぎよっとして目をそらした。おじいさんはヨアキムの方へ歩いて来た。怒られる！ヨアキムは体をこわばらせた。その時、母の手紙があつたのを思い出し、ヨアキムはとっさにそれを渡した。おじいさんはその手紙を見て、少しほほえんだ。

「ヨアキムだね。私はノーウエル。待っていたよ。さあ、うちに入り。なに、心配することはない。」

ヨアキムはその言葉に促されてノーウエルと名のるおじいさんの家に入って行った。

「始めまして、ヨアキム。おっと失礼、そのソファに腰掛けて。」

ヨアキムはノーウエルと名乗るその人物に言われるまま、暖炉のそばのソファに腰掛けた。ヨアキムが座ると、どこからか大きな茶色の犬が飛び出て来た。犬は二匹いた。ヨアキムは突然大きな犬に飛びつかれて、声を張り上げた。ノーウエルはその二匹の犬を口笛で呼んだ。そして、犬たちに話しかけた。

「ジャック、ダニエル、こっちにおいで。」

ノーウエルはヨアキムに謝った。

「すまない、子どもに会うのが久しぶりでな、奴らも興奮しているんじゃない。」

ノーウエルはヨアキムに尋ねた。

「何か飲むかな？」

ヨアキムは小さな声で、いりません、と答えた。ノーウエルはほっと笑ってから、何か飲みたくなったら遠慮せずに言うように言った。ヨアキムはその時初めてノーウエルの顔をまじまじと見た。皆は頭がおかしいだの変人だのと言っているが、その目は優しく、温かい。お母さんの知っている人だ、決して怪しい人物ではないだろう、そう思ったが、ふと学校で言われたことを思い出した。「悪い人は優しい顔をして近づいてくる」、と。

ヨアキムは少し警戒しながら、ノーウエルと向き合った。

「何から話そうか。君は少し警戒しているようだね。まあ、突然変だと言われている老人に招かれたんだ、無理もない。だがね、お母さんは、君のお母さんのソフィは、私の話を信じてくれたよ。」

ヨアキムは突然母の話をされたので戸惑った。ノーウエルは続けた。

「単刀直入に言おう。私は．．．．．サンタクロースだ。」

ヨアキムはしばらくぼかんとしていた。「まさか。いや、やっぱりこのおじいさんは頭がおかしいんだ。」ヨアキムは心の中でそう思っていた。

するとノーウエルはその心を読み取るかのように言った。

「まさか、きつと思ひ込みが激しいじいさんだ、くらいに思っているんだろうが．．．まあ突然言っただけ信じるほど君は純真じゃなからう。」

「純真じゃない」、その言葉にヨアキムは少しむっとした。

「純真じゃない、それは大人になるにつれ避けられないことなんじゃ。だがー今の世界はそれが進むのが早すぎる。いつかは皆サンタクロースが父や母と知る。そりゃそうじゃ、わたちの数はいくらでも100人。そんな少数で世界中を回ることなど出来やしない。だからわたちはそれぞれのお父さんやお母さんに頼むんじゃ、そ

つと心に届くように、優しさのかけらを一年かけて。だが……
今は違う。誰も信じやしない。いないと言われるこの存在。かつて夢を配る仕事と誇りを持てたこの仕事を、まるで伝染病のウイルスのような扱いをされる。誰も、子どもたちや大人をたぶらかそうなど、互いに憎みあうようになどしていかない。なのにある日突然……

あれは寒い寒い日だった。わしはいつものようにジャックとダニエルの引くそりに荷物を積んでいた。テレビを見ながら、な。すると突然緊急速報があった。わしはまたどこかで紛争でも怒ったかと、少し顔を曇らせた。違ったよ。クリスマスは、禁止だと。初めは多くの大人も反対した。特に若い人たちが、先頭に立った。しかし、いつのまにか、彼らは禁止促進派に回っていた。そしてある日、ドアを叩く音がした。わしはダニエルにできるように言った。ダニエルはいきなりトナカイがでたらびっくりするとぶつくさ言っておった。ダニエルがドアを開けると、そこにはいつも来る人とは違う顔があったそうだ。そしてトナカイのダニエルを見ると、大声で叫んだ。ダニエルも驚いてわしを呼んだ。「ノーウエル！いつもと違う人だ！でて！早く！」と。

すぐさま玄関に向かうと、5、6人いただろうか。役人風の男と数人の女がいた。そして言った。

ノーウエル・セントクロウズだね、と。わしはそうですが、どのようなご用件でしょうかと尋ねた。彼らは言ったよ、話を伺いたい、とな。

彼らは、招き入れると、すぐに話を切り出した。そして尋ねた。名前、職業、年齢、その他諸々だ。一通り尋ねた後、彼らの一人が言った。今年限り、クリスマスは廃止だと。

なぜですか、私はそう尋ねた。納得できるものか。すると一人の女が言った。

「クリスマスを祝わなければ、世界に紛争は起こりません。そして、

子どもたちも平等の見地から言って救われます。』

おかしな話だ。そんなことは詭弁だ。もちろん反論した。だが、
だがそう決められた以上、何も出来やしない。無理だったんだ。そ
のうちにサンタクロースというものの存在はおとぎ話の世界にしか
存在しないと言われるようになった。それでも、とわしたちは出来
る範囲で夢とささやかな贈り物を配っていた。

しかしある時、一人の女の子の家に行ったとき、その子が言った
のさ。「泥棒」とね。わしはそれ以後サンタクロースとしていきる
ことをやめた。

いつしかわたしたちの存在は消された。それだけなら役目がおわつ
たとも思えるだろう。だが現実が違う。今の子どもたちはどうだ？
夢も希望もない。ささやかなそれさえ持てず、何のために生きる？
だからわしらは考えた。クリスマスを取り戻そうと。」

ヨアキムはそれでもまだ信じられなかった。だからノーウェルに
言った。

「証拠は？」

「ない。あれば初めから見せれば一番手っ取り早い。だがない。」

「ひとつも？」

ノーウェルはしばらく考え込んだ。すると二匹の犬が騒ぎ始めた。
ノーウェルは一瞬はつとした顔を見せた後、ヨアキムに言った。

「トナカイを見せれば信じるかね？」

それだけで証拠になるんだろうか、そう思ったが、ヨアキムは頷
いた。

「ジャック、ダニエル、『メリークリスマス！』」

その時、犬は突然大きくなっていった。見る見るうちに角が生え、
立派なトナカイとなった。それを見て、ノーウェルは言った。

「信じるかい？」

ヨアキムは目を輝かせていった。

「もちろん！」

第二章 一人目の仲間

ヨアキムは今日のことをベッドで考え込んでいた。突然犬がトナカイになったこと、ノーウエルの話― 夢を見ていたのかも しない。 そう思ったが、母親を亡くしてからふさぎ込んでいたヨアキムにとって、それは魅力的だった。 「ごっこ」でもいい。 なんだか物語の主人公にでもなったようだ。 ヨアキムは久しぶりにわくわくした気分になっていた。 そして頭の中でノーウエルの言葉を復唱した。

「信じる気持ちがサンタクロースにとっての力だ。」
しかしヨアキムは少し疑問に思った。 いったいどうやってクリスマスを取り戻すんだろう？ 自分一人じゃ無理だ。 こういう時、物語では、仲間がいるはずなんだけどな……明日ノーウエルに聞いてみよう。
いろいろと想像するうちにいつの間にか、ヨアキムは深い眠りに落ちていった。

朝が来た。 どころなく今朝は昨日までの朝と違うようだ。 でもいつもと同じように学校に行かなくてはならない。 ヨアキムは学校が終わるのが待ち遠しかった。

学校が終わるとすぐにノーウエルの家に行った。

息せきかけていくと、ノーウエルはコーヒーを飲んでいた。

「おや、きてくれたのか。」

「もちろん。 ホントに信じてるわけじゃないけど、でも楽しそうだから。 ねえねえ、一体僕は何をしたらしいの？ クリスマス

を取り戻すっていったって、僕一人じゃ無理だよな？」

「うむ、一人では無理だな。」

「じゃあやっぱり仲間が必要だよな。」

「そういうことになるかな。」

「どうすればいいの？」

「さてどうすればいいかな。」

「教えてよ！」

「自分で考えなきゃダメだ。何でも人に頼ってばかりじゃ、クリスマスを取り戻すことなんて出来やしない。」

「だって……。」

その時、犬の姿に戻っていたジャックとダニエルがヨアキムのもとへやって来た。そして目配せをした。

「ほう、ジャックとダニエルがヒントをくれるようだ。ついていてみなさい。彼らの言葉によく耳をすますことじゃ。」

ヨアキムは二匹の後についていった。彼らが連れて行ったのはノウエルの書斎だった。そこには巨大な地球儀とカクテルがおいてあった。ジャックはその地球儀を前足でかいた。ヨアキムはそれを覗き込んだが、特に何も無い。なんだろう、ヨアキムは辺りを見渡した。するとダニエルがカクテルに向かって吠える。

「ダニエル、何かを言っているのはわかるんだけど、お酒は僕にはわからないよ。」

ダニエルはその言葉を聞き、書斎にある本棚に飛びかかった。ヨアキムがその本棚の前に行くと、そこには『カクテルの全て』という本があった。

「ずいぶん分厚い本……ここから探せって言うの？多すぎるよ。」

ヨアキムは弱音を吐いた。だがヨアキムはすぐにその言葉が間違いだとわかった。なぜなら、その本には付箋が付けてあったからだ。ヨアキムは付箋のページを開いた。何ページ目だっただろう、ヨアキムはそこにあるカクテルとそっくりなカクテルのページに辿り着いた。

マンハッタン

それがこのカクテルの名前だった。ジャックは地球儀に向かって吠えた。ヨアキムはマンハッタンの位置を探し、そつと顔を近づけてみた―

「君はだれ？」

ヨアキムは驚いて声の主を見た。そこは誰かの部屋。子ども部屋。僕は、ヨアキム。ヨアキム・ハルデン。」

「どこからきたの？」

「えっ。」

「今、僕が後ろを向いていたら、君がいつの間にかいた。」

「そ、それは……。」

「ねえ、もしかして、魔法が使えるの？」

「そんな事できないよ……。」

「じゃあどうやって入ったの？」

「わからない。地球儀を見てたら、サンタクロースの地球儀を見ていたら、急に―」

「すごい！」

その部屋の主の少年は歓びを隠せないようだった。

「絶対いるって思ってたんだ。でも、皆はいないって言うし、煙突がなければ入って来れないと思ってた。でも違うんだね。そうか、魔法の地球儀か……。」

少年は一人で納得したようだった。ヨアキムは困惑していた。なぜ自分がここにいるのかはわからない。しかも来たはいいがどうやって帰るのかすらわからない。ここは、どこ？そしてこの少年はだれ？ヨアキムは不安でいっぱいになった。

「そうだ、名前を言わなくちゃね。僕はクリス・ロード。よろしくね、ヨアキム。」

「ねえ、クリス、ここはどこ？」

「え？だって地球儀で探したんじゃないの？ここはマンハットン。」
マンハットン。そうだ、あのカクテルの名前は、マンハットンだ

った。ヨアキムは驚きですっかり忘れていた事を、ようやく思い出した。

「ヨアキム、君は何をしに来たの？」

「僕は．．．．．クリスマスを取り戻すために、その、仲間を．．．．．」

「仲間探し？じゃあぜひ僕を入れてよ！きつと力になるよ。」

「う、うん．．．．．」

ヨアキムは半ば押し切られる形でクリスマスを仲間にする事にした。

それは思ってもいなかった事。ヨアキムの想像では、もつと劇的な形―例えば誰かと戦って助けてもらうとか、自分から声をかけるとか―を期待していた。

ところが実際はそうではなかった。少しがっかりした気持ちがヨアキムの中に広がった。

「ねえ、なぜクリスマスを取り戻そうと思ったの？」

「クリスマスがない事で皆どこか寂しい気持ちになっている。はっきりとは言えないけれど何かおかしいんだ。

それで、サンタクロースに頼まれたんだよ。」

「へえ．．．．．でも、クリスマスはあるけど．．．．．」

「え？」

「それ、いつの話？」

ヨアキムはクリスマスの部屋から外を見た。確かにきらきらと家は輝き、電飾にはメリークリスマス、とかいてあるものもある。

「マンハッタンではクリスマスはなくなっていないの？」

「マンハッタンどころかこの国でもやってると思うけど．．．．．」

「もしかして、僕の国だけ？」

ヨアキムは考えた。そういえば、こんなときはタイムスリップなんて事もありえる．．．．．昨日お父さんが見ていたテレビでは、車に乗ってタイムスリップしていたな．．．．．

「今は何年？」

「今は……」

クリスが答えた年は、ヨアキムのいた時代より30年も前だった。クリスは満面の笑みで言った。

「すごいよ、すごい。タイムスリップして、魔法も使えて。まず何をしたらいいんだろう？ そうだ、クリスマスがどんな感じなのか、見せてあげるよ。サンタクロースは何か言ってた？ こうしなさい、とか、宝物をもってこい、とか！」

「なにも……自分で考えて行動しろって……」

「自分でやりなさい、か……」

クリスは少し考え込んでいるようだった。ヨアキムは突然起こる数々の出来事についていけなくなりそうだった。クリスマスをとリモどすつたって、どうすればいいのかわからないのに……そのとき、考え込んでいたクリスがヨアキムに話しかけた。

「とりあえず、さ。クリスマスってというのがどういう事か知らなきゃ。なんにもわからないんでしょ？ だったら教えてあげるよ！ なんてつたって、今はクリスマス！ 街に出れば、クリスマスがどんな事かっていうのがわかるよ。それに図書館にはクリスマスの本がたくさんある。家の中でどうしよう、どうしようって思ってたって仕方ない。まずは行動あるのみ！」

こうして二人は「クリスマス」がどんなものか見に行く事にした。クリスはまず家のまわりを案内した。

「なんだかわくわくするよ。どの家も綺麗に明かりをつけて。もちろんクリスマスはそれだけじゃないよ。家族がみんな集まって、礼拝に行ったり、食事したり。昔は暖炉の前に靴下をぶら下げてたな。暖炉からサンタクロースが入って来て、プレゼントを配るんだ。あと、家の中に大きな木を飾るところもある。その木はクリスマスツリーって言って、たくさんのおーナメント、つまり飾りをつけるんだ。その下にプレゼントがたくさんおいてあって、次の日の朝、それを広げるんだ。それはすごく楽しいよ。クリスマスツリーと言えば、ロックフェラーセンター。あそこは名所だよ。あとで行こう。」

ヨアキムとクリスはバスに乗り、ロックフェラーセンターへ向かった。まだ外は明るく、ツリーに明かりはともっていなかったが、その大きさにヨアキムは驚きを隠せなかった。待ち行く人々は少し楽しそうで、どこことなく歩く様子も浮かれている。店には大きく Merry Christmas と書いた飾りがかかり、その様子はヨアキムの知らない、不思議な世界に見えた。

「どう？」

クリスが聞いた。

「うん．．．．．なんだか、すごく．．．．．たのしそう。なんでこれが禁止されたんだろう．．．．．」

「なんでだろう。でも今は多分それを知る時期じゃないんだよ。いまはクリスマスを取り戻すために必要な作戦を立てる時期なんだから。とはいっても、手がかりも何も無いんじゃないか．．．．．」

二人は考え込んだ。

「サンタクロースは自分で考えろっていうだけでほんとに何もヒントはくれないのかな？」

「そんな事はないと思う。なにかヒントは探せばあるはず。それに．．．．．まだ来たばかりだから、明日もあさってもあるんじゃない。うちに泊まればいいよ。明日は図書館に行つて、クリスマスが始まりだとか、どんな風に行われてるのかとか、色々調べよう。その中にもしかしたらヒントがあるかもしれないね。」

クリスはそういつてヨアキムを勇気づけた。ヨアキムもクリスの言葉に安心したのか、笑みを返した。そしてクリスに言った。

「ありがとう！それで．．．．．一つお願いんだけど．．．．．あのおもちや屋に行つてもいいかな？」

「もちろん！あそこにもヒントがあるかもね。」

クリスは笑つてウインクをした。

次の日、ヨアキムとクリスは42丁目にあるニューヨーク市立図書館に出かけた。図書館は巨大な大理石作りで、ヨアキムは初めて見る建物の大きさに驚いていた。クリスは驚くヨアキムにそつとさ

さやいた。「実は来るのは初めてなんだ」、と。

二人は色々探してみた。するとあまりの資料の多さにどうしたらいいかわからなくなってしまった。

「どうしよう？こんなにあるなんて思わなかったよ……」

「もっとしぼって探してみよう。」

クリスマスは何が知りたいのか、そうすれば、もっと探しやすくなるし、ヒントに辿り着けるはずだよ！」

とは言うものの、何をどうしぼればいいのかわからない。二人はまたそこで壁にぶつかってしまった。とにかく、これだと思うものは持ってくればいい、ヨアキムはそう考えていたし、クリスマスは全部関係がありそうだしぼりきれなかった。大量の本を目の前にしてわけもわからず、ぱらぱらと本をめくっていると、一人の女の人が話しかけて来た。

「君たちは何を探しているの？」

クリスマスを取り戻すためのヒントを探しているんだ、とクリスマスは言いかけたが、それをぐっところえて答えた。

「クリスマスについて調べようと思ったんです。」

「クリスマスの何について調べるの？」

「……それが、決まらなくて。」

その女の人は少し考えたあと、隣の席に座った。

「学校の宿題かなにか？」

「えっと……そうです。」

「あ、そうね、いきなり話しかけてびっくりしてるのよね。私はティティ。ここの司書なんだけど、今日はお休み。大学時代にクリスマスとかサンタクロースとか、そういうったものの研究をしていたの。それで、わんさか本を持っている二人が目に入って。宿題なんだろうな、自分でやらなくちゃいけないことなんだろうな、そう思ったんだけど、つい……ここは蔵書が多すぎて、資料に埋もれちゃうのよ。だから調べたいことがピンポイントで決まっていればすぐ役立つんだけどー何も決まっていないと、今の二人みたいに

なっっちゃうの。もし良ければ、力になるわ。もちろん、お手伝い、
と言う形だから仕上げは二人でやるのよ。」

ティティの話聞き、二人は喜んだ。ヨアキムはこっそりクリスマスに言った。

「もしかしたらこの人がサンタクロースの仲間なのかな？」

「わからないけど、ラッキーだね。」

三人はまず、何を調べるか、それをしぼることから始めた。

三人はサンタクロースの歴史と、クリスマスがどんなイベントなのかを調べることにした。それらについては比較的資料が多かったこと、そしてクリスマスを取り戻すのに直結しそうな事柄だったからだ。ティティは使えそうな資料をピックアップし、クリスマスはその中から必要なことを決め、ヨアキムは調べたことをノートに書く。時には映画のタイトルとあらずじを書くこともあった。それはティティの趣味のようにも感じたが、後で参考になることもあるかもしれないとヨアキムは念のため書いておいたのだ。そして、あまりにも難しい事や曖昧すぎる事柄を除くとノートは一冊分になった。

しかし、書きたいはいいが、それがどれだけクリスマスを取り戻すのに必要なか、クリスとヨアキムは調べている間は初めて知ることも多く、夢中だったが、それが終わるとまた不安にかられた。それを知ってか知らずか、ティティはこれが最後の一冊よ、といって一冊の本を持って来た。その本の表紙には『賢者の贈り物』と記されていた。

「何がクリスマスには必要なかわかるわよ。」

ティティはそう言った後、「仕上げは自分たちでね」と言い残し去っていった。二人がお礼を言うために振り向いたとき、ティティの姿はすでになかった。

二人はティティから渡された本を開いた。

そのとたん、二人は小さなアパートメントの前に立っていた。

「何が起きたの？」

ヨアキムはクリスにささやいた。

「わからない．．．あ、誰かでて来た！」

二人はとっさに隠れた。そしておそろのおそろ首をだした。すると、アパートメントからは美しく長い髪の女の人がでて来た。彼女は誰かを見送っているようだった。視線をうつすと、その先には、彼女の夫か、恋人かわからないが、一人の男性が彼女に手を振っていた。「綺麗な人だねえ．．．」

クリスはうつとりするようにその女性を見つめていた。

「クリス、クリスってば！」

ヨアキムはクリスを揺さぶった。

クリスのはつとして、ヨアキムに言った。

「ねえ、あの人、つけてみようよ！」

「うん、でも、ここどこ？よくわからないのにあんまり動き回っちゃ．．．」

「そんな事後で考えればいいよ！」

ヨアキムはクリスの強引さを少し不満に思ったが、仕方なく後をつけることにした。

その男の人はシヨウウインドウに飾つてある櫛を見てため息をついていた。そして時折ポケットから美しい時計をだしては、それと見比べていた。それだけだった。その後その人はバスに乗ってどこかへ行ってしまった。

「なんだ、これだけか．．．」

二人が気落ちしてぶらぶら歩いていると、さっき男の人を見つめていた女の人が前からやって来た。その人は美容院に入つていった。二人がガラス越しに見ると女の人は長い髪をほどこいた。そして、なにかを店員に言った後、髪の毛をバツサリと切った。

彼女は長く美しい髪を切ったあと、店員からお金をもらい、それを大事そうに握つてどこかへ駆けていった。

「どうおもう?」

「なにが?」

「さっきの女の人は長かった髪をバツサリ切った。そのお金を何に使うんだろう?」

「うーん、なんだろう。」

二人は歩きながら話をした。そもそもなぜこんなところにいるのか。本を開いたとたん、見知らぬ場所へ来た。

「この本を開いたんだよね……」

ヨアキムはもう一度本を開いた。しかし何も起きない。

と、ヨアキムはその本の挿絵に目が行った。

「クリス、これ見て!」

クリスが覗き込むとそこにはさっきの女の人と男の人にそっくりな人物が描かれていた。

「これ、さっきの人たちだよね? ねえ、クリス、この本読んだことある?」

「……ある。」

「どんな話?」

「あまり良くは覚えていないんだけど、夫婦が、お互いに大事なものを売っちゃって……」

「ねえ、もしかして、これって、」

「あの二人だ!」

いつの間にか日は沈み、二人はまたアパートメントの前に戻って来た。男の人が帰るのを待ったために。外は寒く、二人はお腹がすきはじめていた。がたがた震えていると女の人が突然扉を開けた。

「何をしているの?」

「あの、道に迷って……」

「あら、ねえ、大丈夫? こんなに冷えているじゃない。あまり大したものはないけれど、少し休んでいきなさい。暖まったら、バス停まで送るわ。」

二人は中に入った。決して裕福そうな部屋ではなかったが、清潔

にしている様子が見て取れた。女の人はココアを作って二人に持って来た。

「私はデラ。音がするから夫のジムかと思ったら……でもなぜこの前に？」

「あの、気付いたらここで、道を聞こうと思ってー」
デラは笑った。

「嘘がへたね。大方家出でもして来たんでしょう？」

三人で話をしているとドアの前で音がした。デラが立つとそこにはジムがいた。二人は耳をそばだてた。しばらく何かをデラとジムは話していた。そしてしばしの無言の後、

「メリークリスマス、デラ。実は、君にプレゼントがあるんだ。」

「お帰りなさい、ジム。私も貴方にプレゼントがあるの。」
デラとジムは小さな叫び声をあげた。

「素敵な櫛……」

「すばらしい鎖……」

ヨアキムとクリスは本のページをめくった。そして彼らも驚きの声をあげた。

そのとき、柔らかな光が二人を包み込んだ。遠くでは、デラの声が聞こえていた。

「あら、今いた子たちは？さっきまでここにいたのに……」
ヨアキムとクリスはそのまま目を閉じた。

気付くとそこはもとの図書館だった。いつの間にか眠ってしまった。既に窓には西日が差し込んでおり、人々は帰り支度を始めている。

「寝ていた？」

ヨアキムはクリスに尋ねた。するとクリスは首を横に振った。クリスはヨアキムの手の中と本を指し示した。ヨアキムの手の中には小さなハート形のオーナメント。そして本の中には二人が飲みかけたココアの絵。

不思議な体験．．．二人はそう思っていた。

「ねえ、クリスマス、このオーナメントは．．．」

「わからない。わからないけれど、多分、これを集めていくことがなにかのヒントになるんだと思う。」

二人は席を立った。試しにもう一度本を開いてみた。だがもう何も起こらなかった。

ヨアキムより背の高いクリスマスが本を棚に戻した。

「帰ろう。」

ヨアキムは頷いた。

二人はベッドに潜り込みながら話し込んでいた。今日あったふしぎな体験。手に残ったオーナメント。そして、これからのこと。

多分―このオーナメントを集めることがクリスマスを取り戻すきっかけになる、二人はそう確信していた。だが、この先どうすればいいのか全くわからない。オーナメントをひっくり返してみたり、光にすかしてみたりしてみたが何も変化はない。

「ねえ、ヨアキム、きみはどう思う？」

「この先、って事？」

「そう．．．．．また図書館に行ってみる？ ティティがいるかもしれないし。」

「そうだね．．．．．でもティティがまたヒントをくれるとは限らないよ。僕は、もしかしたらこのノートになにかヒントが載っている気がするんだけど。」

「うん．．．．．また明日考えよう。なんだか眠くなっちゃったよ．．．．．」

「そうだね、おやすみ。」

二人が寝た後も、家々のイルミネーションは美しく輝いていた。

その光は雪を様々な色に染め上げていた。

第三章 ゴールデン・デイズ

次の日二人は図書館に出かけることは出来なかった。それは図書館が休館日だったからだ。

特別館内整理日

それが図書館の前に立てられた札。二人は行くあてもなく、ただそこに立ち尽くした。

ヨアキムが言った。

「こんな日もあるよ。そうだ、ちょっと、あのおもちゃ屋を覗かない？」

「うん、そうだね、こんな日も、あるよね。何でもそう簡単には進まない、か……」

ヨアキムは珍しく気落ちしたクリスを励まそうと、大げさに身振りを交えながらおもちゃ屋に向かった。

ゴールデン・デイズ

それがおもちゃ屋の名前。ヨアキムが中に入るのは二回目だ。入るとそこにはところ狭しと並んだおもちゃ、おもちゃ、おもちゃ。大人だが、普通のおもちゃ屋と違うのはそのディスプレイにある。大人でも驚くような精巧なミニチュアがあれば、博物館を思わせる立体的な模型。おもちゃというよりもインテリアと呼ぶにふさわしいようなもの。本物かと思まごうような輝くティアラ。なぜかフワフワと浮いているぬいぐるみ。まさに店の名前、おもちゃのゴールデン・デイズ。沈みそうなほどふかふかとした赤絨毯を踏みしめ、二人は中を歩いていった。

店員たちは皆忙しそうだ。だが、好きなものに囲まれているせい

なのか、楽しそうに見える。店内では様々な言葉が行き交う。

「ここはいつ来ても、ディスプレイが変わっているんだよ。」

クリスが言った。

「毎日変えてるの?」

「そう言う訳じゃないと思うけど、でもいつも違うんだ。たまに、あれが見たかったのになあ、とも思うけど……。」

二人が話していると、クリスが突然叫んだ。

「いたっ」

クリスは先を歩いていた人にぶつかったのだった。

「大丈夫?」

ヨアキムは尋ねた。クリスはぶつかった人を見て、ごめんなさい、と言った。その人はヨアキムより一つ二つ年下に見えた。その人は、華奢な感じのする女の子。ちょっとかわいいな、とヨアキムは思ったが、女の子は、なにかを言いかけてぺこりと頭を下げてどこかへ行ってしまった。

ゴールデン・デイズの中にはあちこちに休憩する場所がある。そのどれも変わった椅子で、ヨアキムは背もたれに扉のついた椅子に座っていた。

クリスは飲み物を買って戻ってくると、ハリネズミ型の椅子に座った。

「ねえ、ヨアキム、昨日のノート、持ってる?」

「うん、これだよね。」

「そう、この先どうしようか。」

「ノートが何かのヒントにはなると思うんだけどな……。」

二人はノートをばらばらとめくりながら考えていた。

「そういえばさ、」

ヨアキムが思い出したかのように言った。

「クリスマスって、クリスマスツリーを飾るよね?一番重要なこと忘れてたんじゃない?ここにはクリスマスツリー用の飾りがある、

そこに行けば何かヒントが見つかるかも！」

二人はジュースを一気に飲み干し、一階のクリスマスツリーの側に行った。

ツリーの周りには、今は飾り付け用のものがたくさんおかれている。何から探そう？二人は大きなツリーを見上げた。すると隣にさつきクリスマスがぶつかつた女の子が同じようにツリーを見上げていた。「あ、さっきの。」

二人がにっこり笑うとその女の子も少し照れたように笑った。

「ねえ、君の名前は？」

クリスマスが話しかけた。女の子はしばらく考えてからゆっくり、そして少したどたどしい言葉で返した。

「アン・オハラ。」

「近くに住んでるの？」

「うん。でも、最近、きたの。だから、まだ、よく、言葉が言えない。」

「どこから来たの？」

「日本。」

「日本から！遠くからようこそ。」

クリスマスがもつたいぶつた様子でアン・オハラと名乗る少女に挨拶をしたので、ヨアキムは吹き出してしまった。

「アン、ってよんでいい？」

「うん。」

三人はクリスマスツリーの周りで話し込んでいた。初め少し緊張した様子だったアンも、単語をつなぎあわせ、つつかえつつかえ二人と話していた。

突然三人の横に赤いものが見えた。驚いて顔を上げると、そこにはサンタクロースが立っていた。

「紳士淑女の御三方、クリスマスは楽しみかな？」

そのサンタクロースは胸に錦糸で大きく店の名前が書いてあったので、中身はおそらく店員だろうと思われた。しかし万が一という

こともある。ヒントをくれるかもしれない、そんなかすかな期待を抱いてヨアキムはサンタクローズにほぼえんだ。

「もちろん楽しみです。」

「そうかそうか、では来店の記念に、当店オリジナルキーホルダーをどうぞ。」

そう言い残してサンタクローズ（の格好をした店員）は行ってしまった。

「なんだ、やっぱりないか……………」

ヨアキムは少しがっかりした。

「何か、探してるの？」

ヨアキムとクリスは顔を見合わせた。これ以上ここには何もなさそうだと思っただし、それに誰かに話したいという気持ちもあり、アンにわかりやすいように初めから話をした。アンは楽しそうに聞いていた。くるくる変わる表情はとても可愛らしい。頷くたびにさらさらの黒髪が揺れる。

「あまり、ヒントにならない、かも。けれど、…………クリスマスツリーって、ずっと緑……………」

「常緑樹？えーとね、一年中緑の木って意味。」

「そう！」

「でも……………関係ないかな？」

「わからないー」

一周回って来たのか、さっきのサンタクローズ（の格好をした店員）がまた三人の元にやって来た。

「ホウホウホウ！クリスマスツリーをお求めかな？クリスマスツリーコーナーはあちらです。」

彼はそう言い残して去っていった。サンタクローズ（の格好をした店員）が示した先にはプラスチックで出来たクリスマスツリーが並んでいる。

「一応行ってみるか。」

クリス、ヨアキムが歩き出すとアンも後からついて来た。

コーナーの入り口にはクリスマスツリーの歴史が立て看板のように立っている。

「どこかでこれ、読んだような．．．．．?」

ヨアキムは持っていたノートを開いた。

そこには確かにクリスマスツリーの歴史が書き留めてあった。ア
ンが後ろからヨアキムのノートを覗き込んだ。三人は立て看板とノ
ートを交互に見比べた。そして、立て看板の最後まで読んだとき、
そこには他とは違う字体でこう記されていた。

クリスマスツリーをみて

三人は同時に後ろのクリスマスツリーを振り返った。すると一
光が三人を包んだ。ゴールドンデイズの店内はキラキラした星屑の
ようなもので覆われた。

「なに?!」

アンは大きな目をさらに丸くしてクリスに尋ねた。クリスはヨア
キムに言った。

「これって、あのと時の感覚になんだかにてない?」

「たしかに．．．．．」

「どういうこと? 私にも、教えて!」

「さっき、話したこと、覚えてる?」

「うん、不思議な体験をしたって．．．．．」

「たぶんそれ。」

「すごすぎ!．．．．．信じられない。」

より強い光が三人を包んだ。一瞬、三人はそのあまりのまぶしさに目を閉じた。そして再び目をあけると．．．．．

そこは同じ、ゴールドン・デイズの店内だった。しかしさっきま
でと違うのは、その店内はサンタクロースで溢れていたということ、
おもちゃは見たこともないようなものになっていること、そして、
店内の窓から見た外の景色が、どんどんと変わっていくことだった。

「ここはどこ？」

ヨアキムが誰に聞くでもなくつぶやいた。

「やあ、さっきの君たちだね。ここはゴールデン・デイズ、アビーズ・ヴィスカム店。」

それに答えたのはクリスマスでも、アンでもなかった。答えたのは、さっき、ヨアキムたちにクリスマスツリーの場所を教えた、店員だった。

「君たちはここになぜこれたのかな？」

店員はニコニコしながら尋ねた。

「なぜって……」

三人は戸惑いを隠せなかった。アビーズなんか、という場所が一体どこなのかも分からない、そしてなぜ自分たちが来たのかもわからない。おまけにさっきの店員がなぜかいる。自分たちでさえ何もわからないのに、どうして答えられるだろう？

「ゴールデン・デイズの支店はここにしかない。普通の人はここには来れないんだ。もし来れるとしたら……それはサンタクロースだけなんだよね。君たちは見たところサンタクロースじゃないし、本店から来るためには僕が案内することになってる。」

店員は笑い出しそうなのを必死でこらえながら説明した。クリスマスはその顔にむつとしたのか、少し乱暴な言い方で答えた。

「どうやって来たかなんてわかる訳ないだろ。こっちが聞きたいくらいだよ！大体なんでそんなに笑ってんだよ。人に話をするときは笑うもんじゃない！それとも何か知ってるのか？！知ってるから笑ってるのか？！」

「おっとこれは失礼。いい育てかたをされてるね。そうだね、君……ロード君のいうとおりだ。確かに人に話をする時にはにやにやするのは失礼だね。行こう、こんなところじゃうるさくって話も出さない。あたたかい紅茶でも用意するから、一緒についといで。」

そう言っただけで店員は一人ですたすたと歩いていってしまった。アンは不安と期待の入り交じった顔で二人を見た。

「行こう。」

ヨアキムは疑って動こうとしないクリスをなだめ、着いていきたそうにヨアキムを見るアンに声をかけ、急いで店員の後を着いていた。

店員と、三人が着いたのは三階にある部屋だった。

「さあどうぞ。」

店員がその重厚な扉を開けた。中に招き入れられると、三人は驚きの声を上げた。

「まあまあ座って。」

店員は驚きできよろきよろしている三人に腰掛けるよう勧めた。

「どうだい、この部屋！ここはクリスマス対策室兼社長室。あっちこっちに高く積み立てるのは世界中から集めて来たプレゼント。おもちゃもあるし、そうでないものもある。お菓子なんかもあるね。あとはプレゼントにつけるカード類。本もある。最近では電気製品も扱ってる。おもちゃって言っても赤ちゃん用のものから、もっと年上向けのものもある。それに、ここすごいところは何といっても、『懐かしい』おもちゃがあること、かな。」

店員は一人でべらべらとしゃべって、三人を見つめていた。それがまた余計にイライラしたのか、クリスは話を遮った。

「で、ここはどこで、何を知ってるのかいってくださいよ！」

「そうだね、ついつい……。」

店員は座り直して三人に挨拶をした。

「初めまして。店長のアドニス・ティツィアーノです。」

クリスはこの目の前に座っている、若く、おしゃべりな男が店長だと名乗ったのを聞いて、怒りが少し引いたようだった。

「ここはゴールデン・デイズ、アビーズ・ヴィスカム店。これはさつき言ったね。アビーズ・ヴィスカムというのはこの『世界』の場所の名前。つまり、君たちの通常生きている世界とは別に、いくつもある世界の内の一つだ。この他の世界については僕も詳しくは知らないし、どう出来たのかも知らない。だからここではその話はな

しだ。いいね？じゃあ、この世界について簡単に話をしていこう。
この世界は、そうだな．．．．まず、昔、世界は一つの大きな
大陸だったという話を知ってるかな。それはパンゲア、というのだ
けれど、ここはそれと似たような世界だと思ってもらえばいい。つ
まり、大陸そのものは分かれているんだけど、一つの大陸のように
行き来が自由なんだ。だから言語は一つで事足りる。文化はそれぞ
れで違っているけど、誰もそれを変だとは思わないし、自分たちの
地域の文化を押し付けようとも思わない。それが、この『世界』。
今いるアビーズ・ヴィスカムは文化の十字路口にあたる地域だ。」
「そこになんで、マンハッタンの、おもちゃ屋の支店があるんです
か？」

アンが尋ねた。直後、アンは驚いた顔をした。

「小原杏さんだね。『二つとも』いい質問だ。まず、一つ。元々は
こつちが本店だ。だけど、君たちの世界にこの店が必要だと思っ
た。だからあつちを本店にしたんだ。二つめ。言葉は一つで通じるって、
いったら？伝えたい思いがあればちゃんと通じるんだよ。」

「なんで、僕たちの、世界にこの店が必要だと思っただんですか？」

「ヨアキム・ハルデン君。君もなかなかいいセンスだ。それは、お
いおいわかる。今は話すべき時じゃない。時がくれば、自ずとわか
るさ。近い将来、ね。」

「まだ、僕の質問には答えてもらってないんですけど．．．．」
「おっと、そうだったね。クリス・ロード君。さっきから君をやき
もきさせてばかりだね。こつちに来るためには僕の案内が必要だっ
ていうのは覚えてる？あの店の中はどこだってここに来られるよう
になってる。でも、僕がそのとき決めたキーフレーズを知らなきゃ
来られない。君たちに示したあの立て看板が今回のキーフレーズだ
った訳さ。何か知ってるのかと君は言ったね。全てを知っている訳
ではないけれど、僕の知っていることを君たちに話そうと思った。
それで呼んだ訳だ。さて、まだ紅茶をだしてなかったね。少し待っ
ていてくれるかな。」

アドニスはその言うて奥に行った。しばらくすると大きなポットになみなみと入れた紅茶と、たくさんの見たこともないようなお菓子、よく目にするお菓子をワゴンに乗せて持ってきた。そしてお茶を勧めると、自分もそれらをバクバクと食べ始めた。

「話したいことってというのはさ、」

その手にはふかふかのわたあめ。

「何が起きているのかっていうことなんだ。」

すでにそれはなくなって、色がどんどん変わるクッキーが口の中に消えていった。

「僕はこの国で生まれ育った。この世界が好きだ。君たちのいる世界とは違っているけれど、違っていたっていい。ここは一言でいえば、君たちからすれば、ということなんだけれどーおとき話や夢の世界だ。僕たちの世界と君たちの世界とは密接にかかわっている。君たちが考えたすばらしいことはこの世界に瞬時に吸収される。君たちの世界で考えられた物語はこの世界で現実になるんだ。とは言ってもこの世界には不思議な規制がかかっていてね、争いごとみたいな、要するに夢を壊すようなもの……そういうのははじいてしまうんだ。なぜそうなるんだろうね。君たちももしかしたら既に体験しているんじゃないかな？」

アドニスはそういつて紅茶を飲み干し、フルーツのたくさん乗ったケーキをワンホール引き寄せた。

「確か、賢者の贈り物っていう本ありますよね？あの世界に行ったみたいなんです！」

ヨアキムがアドニスにいった。

「そうだね、おそらくそうだとおもうよ。どこにあるかは知らないけれど、その本に出てくる彼らがいるってことは知ってるよ。この世界は君たちの夢から成り立っている世界だ。いたっておかしくない。何てったってあれは名作だからね。」

いつの間にかケーキは半分なくなっていた。

「それでね、話の本題なんだけれど、何が起きてるのか、僕にはわ

からない。ただ、おかしい感じがするんだ。勘違ってやつかな。できればあたらないでほしいんだけど。君たちにもいった通り、ここに来るためには僕の案内が必要なんだ。そしてやってくるのは夢を持った大人、サンタクローズ……そんな人たちだ。みんな初めてここにきたときは目を輝かせて、子どもみたいに店内を走り回るんだ。そしてあたらしい夢を作り出す。その夢はまたこの店内にあふれ、ますます品物は充実する。すてきなサイクルじゃないか！でも……そのサイクルがおかしくなっている。これまでも時々おかしくなる事はあったみたいだね。誰もが夢をなくし、絶望と憎しみと悲しみだけになってしまふとき……それがどんなときは、君たちにもわかるだろう。君たちの世界からお客さんがやってこなくなった。何も生み出されなくなった。細々と描かれたおとぎ話は完結しないまま消えてしまった。作者はどうしているのだろう。こつちの世界の図書館には未完の大作もたくさん蔵書として残っているよ。

悲しい話があふれた。この店も、この世界も、どこか冷たい風が吹き込むようになった。でも、その度にこの店も世界も再生した。なぜ？夢は、愛は、どんなものよりも強いからさ。決して消えたりはしない。パンドラの箱ってはなしを知ってるかい？最後に出てくるものは、希望だよ。そうしてこの世界は何度も危機を逃れてきた。だけど……」

アドニス是不意に困ったような、悲しそうな顔をした。それまでひたすら食べ続けていたお菓子も紅茶もいつの間にか食べる事をやめていた。

「何かが変わっている。僕にはそれしかわからない。僕にはどうする事もできない。だから君たちの力を借りようとおもったんだ。大人たちが変えようとしているのはなんだろう。大切なものが消えかけている。」

「なぜ、そう思うの？」

「アンはゆっくりといった。」

「わからない。でもあえていうとしたら、お客さんが減っている、
つて事かな。これから先、何か大きなことが起きようとしている。
君たちもいつかは大人になる。ずっと子どものままではいられない。
それは仕方のない事、逃れられない事実。だけど、自分たちのため
に子どもたちを苦しませる事はしてほしくない。だから君たちに頼
むんだ。」

「なぜ、私たちなの？この世界を変えるためには、私たちよりもも
つとふさわしい人がいるはずだし、私たちの世界を変えるなら、私
たちよりもずっと力のある人に頼めばいいんじゃない？」

「それはもつともな意見だ。でも、君たちに頼んじやいけないって
こともないだろう？」

クリスはしばらく黙って聞いていたが、思い切ったようにアドニ
スに尋ねた。

「ねえ、何か、隠してない？」

アドニスはまた少し困った顔をした。そして優しい声——それは
とても心地のいい声だった——で言った。

「いずれ、すべてわかる。」

こんな答えで納得するはずもないが、三人はとりあえずうなづい
た。断る理由もなかったし、何よりそれがこれまで体験した事にな
いような出来事になりそうな気がしたからだ。

「それで、君たちには道しるべが必要だとおもう。目標は、君たち
の世界、そして僕たちの世界を元に戻すこと。」

「救うんじやなくて？」

クリスが不満げに言った。

「救う事ができるのはいつだって自分たち自身だけだ。だから、君
たちが救うのは君たち自身。でもそれが結果としてきつと大きなも
のをもたらすとおもうよ。さて、今日はここまでだ。また明日、今
後の事を話そう。今日は店に泊まるといい。三人一緒……
はいやかな？レディがいる事だしね。この店の5階は僕が住んでる。
部屋はたくさんあるから好きな部屋を選ぶといい。食事のときはま

た呼ぶよ。じゃあ僕はこいつを片付けてからいくから、それまで店をみるなり、部屋をみるなりするといいよ。」

アドニスはそのういつてワゴンを運んでいった。三人は今までの話が整理しきれずにしばし呆然としていた。

「クリスはうるたえ、ヨアキムは目を輝かせた。アンはその両方。」

しばらくしてから食事の準備ができたアドニスが三人を呼びにきた。食事が終わるとアドニスは再び話を始めた。

「いいかい。この世界は四季がある。君たちは今、そのすべての交わる場所ーアビーズ・ヴィスカムにいる。」

ここからスタートだ。春、夏、秋、冬．．．それぞれの場所のそれぞれの問題を解決していかなくちやいけない。君たちの世界で起きていることが元になって、それぞれ深刻な危機に見舞われている。それを、助けてほしい。途中で堪え難いほどの、越えられないほどの壁にぶつかるともかもしれない。でも君たちならきつと越えられる。信じているよ。そうだ、君たちの手助けになるようにちよつとしたものをプレゼントしよう。」

アドニスはそういつて誰かを呼んだ。呼ばれたのは下の階の店員のようだった。彼女は大きな袋を抱えてやってきた。

「適当にみつくるつてくれた？」

「はい。お役に立てれば、と思つていろいろ詰めてきたらこんなになつてしまいました。この中から選んでください。」

「うーん、全部あげる必要はないだろうからー。」

「クリスはアドニスの言葉を遮つて叫んだ。」

「全部ください！」

「だめだよ。」

アドニスは諭すように、しかし一人前としてクリスに話しかけた。「すべてを誰かからもらつても、君たちのためにはならない。このことは、これから君たちが体験するすべてのことに言えることだよ。とても大事なことだ。きつかけは誰かから与えられたとしてもいい。だけど、結果を出すのは自分自身だ。自分の力で進んでいかなくち

や。君の人生だ。誰かのものじゃない。選りどつていくのはいつだつて自分自身だ。」

クリスは唇を噛み締めた。そして小さな声で、わかりました、と返事をした。

「ではクリス。君にはこのペンを。ヨアキムには地球儀を。アンにはこのぬいぐるみを。」

三人は一樣に不満げな顔をした。それを見たアドニスと店員は示し合わせたように三人の顔を覗き込んだ。

ヨアキムはその店員の顔をどこかで見かけたような気がした。

「ティティ！」

「こんにちは、ヨアキム。こんにちは、クリス。初めまして、アン。私はティティ。よろしくね。さて、と。あまり気に入ってもらえなかったようだけど、なぜ私たちがこれらをおあなた方に選んだか、わかるかしら？」

三人は首を振った。アンは頬を膨らませてティティに詰め寄った。「ねえ、なぜこれなの？これが何の役に立つの？しかも私だけこんな．．．．．だって袋には弓矢とか、剣とか、コンパスだってあるのに！どうして、こんなものなの？」

「アン、よく考えて。弓矢や剣は力の象徴ね。たくさんのお話にはそれらを与えられることもとても多い。でも、力だけで何とかなる問題よりも、そうではないことの方が多いと思わない？いずれ、必要な時が来るかもしれないけれど、今のあなたたちに必要なのはこんな武器じゃない。今あなたたちに渡したのは、今のあなたたちが持つ力を最大限に引き出す道具たち。アンに渡したぬいぐるみ．．．．．それは、様々な動物に形を変えるの。信頼、それがあなたの持つ力。その子はあなたとの信頼によってたくさん能力を見せてくれるはず。あなたと一緒に成長するの。」

クリス、あなたのペンは正義を引き寄せる。正しきものへと導くペン。そのペンが書くものは、世界を変える力を持つわ。あなたの持つ力は、正義。

そしてヨアキム。あなたの地球儀は小さいけれど、大きな力を持つ。その地球儀は世界で何が起きているかを知らせてくれる。何をすべきか、どう動くべきか、きつとヒントが隠されているわ。この世界の声に耳を傾けて。大丈夫、あなたの持つ力は知だから。」

「どれもゴールデン・デイズの思いが詰まっている。信頼して、彼らと力を合わせるんだ！」

三人はまだ不満そうであったが、同時にひどく興奮もしていた。三つのものは、決してそんな偉大なる力を持つようには見えないが、この不思議な場所の物であると言うだけで何か起きそうな気がしていた。

「さあみんな、旅支度だ！明日、春の国、インファーチエルへ出発だ！」

ゴールデン・デイズの窓の景色はめまぐるしく変わる。その晩もお客はひっきりなしにやってくる。

誰もが、これから起きる出来事に期待を寄せていた。

アドニスには眠っている三人をみつめて、そつとなでた。

「君たちなら、大丈夫。」

第四章 思考の迷路

アドニスとティティはゴールデン・デイズの周りを眺めた。

「変えられるだろうか。」

アドニスの問いにティティは答えた。

「変えられるはずです。」

彼らはこの先、三人の子どもたちがぶつかるとは壁を知っていた。しかしそれ乗り越えることができるのは彼らではなく子どもたちの力だけだ。

「僕たちは、あの子たちにできるだけのことをしてあげたい。限界があることも知っている。だけど本当にこれだけしかできないんだらうか？」

「信じましょう。子どもたちは大人が思うほど、頼りない存在ではありません。私たちは子どもたちに何かを『してあげる』のではなく、その方法を『教える』だけでいいんです。そうすれば、子どもたちは自分で広い世界に歩き出せますから。さあ、いきましよう。子どもたちを見送りに！」

クリス、ヨアキム、アンは旅の支度をして待っていた。アドニスとティティは店の四つある扉のうちの一つを開いた。

「ここから先は君たちの道だ。この通りをまっすぐ歩いていくと十字路がある。東へ進みなさい。そうすると宮殿がある。それがインファーチェルの中心地だ。」

「何をしたらいいの？」

アンが尋ねた。

それに答えたのはアドニスでもティティでもなく、クリスだった。

「自分たちで決めるんだよ。必要なら、これが教えてくれるよ。」

クリスは自分のペンを指した。その言葉を聞いたティティは自分の言葉が正しかったことを確信したようにアドニスに笑いかけた。

アドニスもティティに笑顔を返した。子どもの成長は大人のそれとは比べ物にならないくらい早い。三人はこれからの出来事を心待ちにしているようだった。

「さあ、いつてらっしゃい。」

「いつてきます！」

三人の言葉が響いた。そのとき、インファーチェルの方向からどつと風が吹き、三人の行くこうとする道には色とりどりの花が咲いた。手を振るアドニスとティティに手をふりかえしながら三人は花の道を進んでいった。

それほど長い道のりを歩いた訳ではなかった。ゴールデン・デイズを出てからほどなく、三人は十字路にたどり着いた。

「ここを左？右？まつすぐだっけ？」

「右じゃなかったかな。そうするとすぐ宮殿が見えるはず……………」

「あ、あれじゃない?!」

アンの示した方向には輝く真つ白な宮殿があった。そこに至る道はやはり花が咲き誇っている。それはまるで三人の行く先を示すかのようだった。三人が再び歩き出そうとすると遠くから誰かがやってくるのが見えた。次第にそれは近づき……………そして目の前で止まった。近づいてきたそれは遠目では馬車のように見えたが、イー率いていたのは、巨大な、蛇。

クリスは大声を上げて飛び退いた。アンは平気な顔をして降りてきた人に挨拶をした。

「はじめまして。私は小原杏です。あなたは？」

「これは……………小さなレディ、レディ・アンとお呼びしてもかまいませんか？わたくしはエクス。こちらは私のパートナー、イーズです。」

「エクスさん、よろしくお願ひします。イーズ……………さんも。僕はヨアキム・ハルデン。」

ヨアキムがおそろおそろイーズに声をかけた。クリスはヨアキムの後ろから覗いている。エクスとクリスの目が合った。クリスはイ

ーズを見ないようにして、消え入りそうな声で名乗った。

「クリス・ロードです……」

挨拶がすむとエクスは三人にいった。

「わたくしは御三方をお迎えにきた訳ですが……少し急いでかまいませんか？ロイグ様が皆様のお着きをお待ちしておりますので。」

三人は「馬車」に乗り込んだ。外でエクスがイーズに出発の合図をする声が聞こえた。「馬車」は静かに動き出した。中はほのかに花の香りがする。揺れもほとんどなく快適なことこの上ない。「馬車」は速度を増す。

三人がうとうとしかけた頃、「馬車」は宮殿へと到着した。

ふっと眠気がとれたヨアキムは、宮殿が妙に静かなことに気がついた。

「さあ、着きましたよ。」

三人は広場に降り立った。広場はしんと静まり返っている。エクスがイーズの手綱を外し、三人に言った。

「ご案内いたしますので、わたくしのあとを着いてきてください。

もうお気づきでしょうが——この静けさの訳をお話いたします。」

エクスとイーズは先を進む。しかし二人は宮殿にはまっすぐ向かわず、東へ向かった。アンはクリスとヨアキムに遠くなるんじゃない？とささやいた。その声が聞こえたのか否かはわからないが、イーズが笑って言った。

「まっすぐ行った方が近く思えるでしょうが、そうではないのですよ。遠回りしたように見える方が近いことも世の中には多くあります。しかし——まっすぐ行ってみるのもまた一興。ただ、迷ったどりで着けないと困りますから、私が着いていきますよ。」

イーズが着いてくると聞きクリスは一瞬ひるんだ。アンは言われた通りの道を進むと言ったので、クリスとヨアキム、そしてイーズ、アンとエクスの二組に分かれて向かうことにした。クリス、ヨアキム、イーズが出発するとエクスは歩きながらアンに言った。

「二人はイーゾがいなければおそろくたどり着けないでしょう。しかし、はじめのうちにはわざと迷わせるでしょうな。この宮殿の仕掛けは、レディ・アンの故国の城をモチーフにしておりましてな。お聞きかと思いますが、良いものを吸収するのがこの世界です。そのような城の作りをご存じないですか？」

アンは首を横に振った。

「簡単に言いますと近道が遠回り、と言う仕掛けになっております。敵がせめてきた時のためにね。まさかそのようなことにはならないでしょうが……ここは迷宮を模したものが数多くありますな。そのせいなのでしょうが、この国の抱える問題はー。さあ、間もなくです。三人がたどり着くまで、今しばらく待ちましょう。」

アンがエクスに案内された宮殿はロココ様式を思わせた。アンはその様子に魅せられたように宮殿を眺めていた。エクスが次に声をかけるまで、アンはただ立って見とれていた。

「……さん。レディ・アン？」

ふつと我に返ったアンはエクスに尋ねるでもなく、しかし独り言でもなく、宮殿そのものに話しかけるようにつぶやいた。

「こんな……見たことない。」

「ありがとうございます。ロイグ様もお喜びになりますよ。」

エクスは微笑んでアンを案内した。長い長い廊下を歩き、広い広い広間を抜け、小さい部屋の大きなソファにアンを座らせた。

「わたくしはロイグ様にお知らせして参ります。今しばらくお待ちくださいませ。」

エクスはそういうと静かに部屋を下がった。

静かだった。アンは急に心細くなった。二人がいないことがこんなに一人の時間を寂しくさせる。

いつ二人は来るのだろう。そう考えるうち、どこからか時折吹いてくる風に誘われ、アンはいつの間にか眠っていた。

アンは誰か聞いたことのある声が自分を呼んでいるのをきいて目を覚ました。アンを呼んでいたのはヨアキムだった。

「もつきたの？早かったね。」

「え？一時間くらい迷ってたよ。上っていると思ってたのに下つていたり、門の順に進んでいるのに気付いたら元の場所に戻っていたり。迷路みたいだった！あとはー。イーズさんがすごく優しく、始めの怖さは無くなったよ！」

「へえ、そうなんだ。でもイーズさんは別に始めから怖くなかったよ。見た目で人を決めちゃだめじゃない。」

「ひとじゃなくて、蛇だから怖かったの！」

クリスが叫んだ。

「そ、そう。まあ．．．いい『へび』でよかったじゃない。」
アンが興奮するクリスをなだめているとエクスがやってきた。

「三人お揃いですね。では、ロイグ様の下へご案内いたします。」

ロイグのいる部屋は、他の部屋とは異なり、いたってシンプルな作りだった。ロイグは大きめの椅子に腰掛けていたが、三人がエクスに付き添われてやってくると立って出迎えた。三人はあわててお辞儀をした。

「そんなにかしこまらないで。そのの椅子に座って、話を聞いてくれますか。」

三人は言われるままに腰掛けた。ロイグはエクスにも合図をし、全員が座った。それからロイグは話し始めた。

「よくきてくれましたね。私はロイグ。このインファーチエルを治めています。この国は美しい国です。花が一年中咲き誇り、熱くもなく寒くもない。この国は別名として始まりの国、生命の国と呼ばれています。眠っていたものたちが再び動き出すーそれがこの国です。しかし、眠っているものでも起こさぬ方が良くないものもありますね。それが今この国を、私たちを悩ませているのです。私はそれを闇とよんでいます。それ以外に表す方法などあるでしょうか。そ

の間は――人々の中の『違い』を異質なものとして排除する力を持ちます。人々は、思考の迷路にはまり抜け出せなくなっています。どうか、どうか力を貸してください。」

ロイグは頭を深々と下げた。エクスもまた頭を下げた。三人は黙ってそれを見つめていた。どうしたら良いのかわからなかったのだ。アンは必死で考えた。目に見えぬものと戦い、そして打ち勝つ方法を。

「やはり、無理でしょうか。」

エクスが弱々しく言った。ロイグはまだ頭を下げている。

「わかりません。」

アンが答えた。全員がはっとしてアンをみた。

「でも、私たちにできることがあれば……」

一瞬ロイグの顔に落胆の様子が浮かぶ。しかし、その後すぐに笑みを浮かべた。ヨアキムとクリスも互いの顔を見つめて頷いた。

「ありがとう。では詳しく――といっても私の知ることは多くはありませんが、お話ししましょう。」

* * *

「この世界はあなた方の住む世界とリンクしています。あなた方の世界の良いもの、美しいものを糧にこの世界は成長します。もしかしたらどこかで聞いているかもしれませんが、『悪いもの』は不思議な力によってブロックされてきました。まさに理想の世界と言えるでしょう。もちろん美しいものだけ、と言っても、ある『悪』に對してのアンチテーゼとなるものは入ってきます。あなた方の世界の『悪』、戦争であったり、人のもつ負の感情であったり、するものです。しかし入ってはきてもそこで描かれる『悪』は実現はしません。ある時まで、実現はしませんでした。いえ、この言い方はふさわしくはないかもしれませんが。少しずつ、少しずつしみ出していたのに気付けなかったのかもしれませんが。この世界を守っている

力が弱まっていることに私たちは気付かなかったのではなく、気付こうともしませんでした。いつでもこの力は絶対的なもので、私たちは何もしなくていいのだ、そう信じていたのでしょう。それが当たり前だから、考えることすらしなかったのです。その結果、『闇』に浸食され、気付いたときには手遅れになっていた……私ができることはたくさんあったはずなのに、私は何もしなかった！あわてて命令を出しました。食い止めようと、手を尽くしました。ですが、一度広がってしまった『闇』は簡単には排除できません。私には彼らを隔離して、他人と会うことのないようにするか、さもなければ呼びかけ続けることしかできないのです。それが何も最善だと思っている訳ではありません。ですが……他に、何も思いつかないのです。」

ロイグはそういつてうなだれた。始まりの国、生命の国の女王の顔はよく見ると疲れきって青ざめている。「闇」がなければ花のように美しく気高い女王だろうに。もはや手を尽くしきり、それでも解決へ転じない現実にはロイグの命までも枯らそうとしていた。

「女王様。」

ヨアキムがロイグに呼びかけた。

「ロイグで良いですよ。」

「ロイグ……さん。この国の人たちは今どうしているのですか？」

「みな家にいます。そうするよう、命を下しました。ラジオもテレビも映りません。彼らは自分と同じものしか受け入れないからです。少しでも異なるものを出すと、争いが起きるのです。ほんの些細なことなのに。」

「誰とも、会わないんですか？」

「はじめは、自分と同じと思えるもの同士でグループを作っていたんです。ですが、それすらもしくなりました。同じ人間などいる訳がありませんから。今日で一週間です。食べ物は何とか届けさせていますが……。」

「いつかはその人たちは……」

「生きていけなくなるでしょう。」

「本当に全員なのですか？」

クリスが尋ねた。

「わかりません。調べたくとも、難しいのです。」

ロイグの目が潤んだ。黙っていたアンがロイグに尋ねた。

「その人たちにあつて話はできませんか？」

「それはかまいませんが……いいでしょう。できないかもしれないと思うより、一度行ってみてください。」

ただし、私は行けません。ですが、見てきたことや聞いてきたことを私に知らせてください。」

アンはロイグの言葉に頷いた。

* * *

三人は宮殿の外にいた。そばにはエクスとイーズもいる。

「話を聞いてみたいとは言ったけれど……でもどうすればいいんだろう？」

「とりあえず市内を見てみないことにはどうにもならないよ。まずはそこからじゃないかな。」

ヨアキムがアンに言った言葉を受け、エクスが何かを手渡した。

「では……この国の地図です。この国は宮殿を中心にするようにそれぞれの町が取り囲んでいます。それぞれの方角には門があり、それをくぐって街に入ります。」

三人は地図を覗き込んだ。

「なぜ、この地図は黒っぽいんですか？」

「ヨアキム君、よく気付きましたね。この地図は——この国の現状を表しているんですよ。黒っぽいと言うことは、良くないものが蔓延していることを示すのです。」

そのときヨアキムの鞆が光っていることにクリスが気付いた。

「ねえヨアキム、．．．．．なんだか、鞆が．．．．．。」

ヨアキムがあわてて鞆を引き寄せると光っていたのは鞆ではなく、例の地球儀だった。急いで取り出してみると地球儀の光は棒状になり、エクスが手にしていた地図のある場所を照らし出した。イーズは地球儀と地図を交互に見たあと、溜息を漏らしながら言った。

「北だ．．．．．。」

ヨアキムはイーズの言葉が何か悲しみと、怒りが混ざったようなものを感じて尋ねた。

「北には、何かあるんですか？」

「北は．．．．．『闇』が初めてでてきたところだよ。それに――。」

イーズが口をつぐんだ。そのあとをエクスが続けた。

「ある一人の男性が凶行を働いた場所でもありませんよ。」

「凶行？」

「ヨアキム君、世の中には知るべきことと知らない方がいいことの二つがある。この話は後者だよ。」

知らない方がいい。特に、君たちのような子どもは。」

「イーズ、違う。この子どもはいずれその事件を知る。隠しているも仕方のないことではないかね。」

知ったあと、この子たちがどんな風にその事件を乗り越えるか、どう考えるか、何を読み取るか、その方が大事ではないだろうか。」

「だが――！！」

しばらくエクスとイーズの間でやり取りがあった。ヨアキムはそれを眺めながら、この国に広がる闇と言うものの姿を少し理解したような気がした。おそらくイーズは子どもを傷つけまいと、守ろうとしている。それだけ大きな出来事なのだろう。エクスはまたイーズと同じように彼らを守ろうとしている。

やり方が異なるだけなのだ。エクスはあえて立ち向かわせることで悲しみや苦しみがどんなものなのか、知ることを守る術を身につけさせようとしている。どちらが良くてどちらが悪いと言っものでは

ない。それが「違い」。二人はお互いの違いをわかっているからこそパートナーとしてうまくやってきている。これがもし「違い」を認めなかったら？

ーそのもし、が今この国に起きている。

エクスとイーズの話はヨアキムが考えているうちに一段落したようだ。エクスは三人の方に向き直り、イーズは何かをエクスに告げどこかへ去った。

「あの、イーズさんは……………」

「心配しなくても大丈夫ですよ。彼は向かう先が北と知り、車をとりにいっただけです。」

「さっきの話ですけど、北で起きた出来事って……………」

「車の中でお話ししますよ。さあ、イーズが戻ってきました。皆さんのつてください。」

車は静かに北に向かっていている。エクスとイーズはたまにハンドルをいじっているが、特別な操作はしていないようだ。

黙っている三人を見かねたのか、イーズが車について説明を始めた。イーズによるとこの車は風の力で動くのだそうだ。車輪についてはいるが、乗降のときに使うだけで普段は使わない。そしてこの技術は北、これから行く都市、マヒトフロイで培われたものだ。

そしてしばらく黙った。何かを考えていたが、まっすぐに三人を見た。

「これから行くマヒトフロイは様々な技術が発展していました。知恵と想像、それが都市の標語になっているような、職人と知識人の街です。しかしそんな街である日、事件が起きました。一人の男性、彼は私と同じヘビ族でした。彼は市長にと懇願されても、私は人の上に立つのではなく、同じ目線で行きたいと公言しているような人でした。ただの学者として誰かのために生きたいとね。ところがあ朝、市庁舎の上で何かを叫んでいるのが見つかりました。誰かのためなんてまっぴらだ！」

誰もかもが頼ってばかりで何も考えようとしない、そんな大馬鹿者たちと私は違うんだ！そんなことを言っていたと聞いています。そのあと、壁を伝って降りてくると、車で人をはねました。大人たちは避けることができましたが、道路で遊んでいた子どもが数人跳ねられました。彼はすぐに周りの人々によって取り押さえられました。が、この国には争いと言うものがこれまでなく、人々はどう対処したらいいのかわかりませんでした。仕方なく部屋に閉じ込め、図書館で裁判と言うものを片っ端から調べ、精神鑑定を行いました。結果、彼は罪に問われることはありませんでした。

それを不満に思った人々は大勢いました。なぜなら、その後、子どもたちのうちの二人が亡くなったからです。二人は兄妹でした。

いつのまにかその不満は膨らみ、暴動となって現れました。それは彼に対する不満からヘビ族への嫌悪となり、次第に他人に対する憎しみに代わりー。」

イーズは声を詰まらせた。エクスは声をかけようとしたが、イーズはそれを手で制した。イーズの目には涙が浮かんでいたがそれを拭いて残りの言葉を絞り出した。

「他人への憎しみは内乱を引き起こしました。人々はそれまでの友人を殺していったのです。この国には軍がありません。それがないことを国民は誇りに思っています。今回ばかりは違いました。抑えるのが遅れたのです。都市の半分が破壊されました。三分の一に当たる人々が死にました。ー私の妻もそこで死にました。結婚して、ちょうど一年でした。」

皆が黙った。イーズが乗り越えてきたー乗り越えようとしている、その悲しみにかける言葉はなかった。静寂が車に広がる。アンは目を伏せ、クリスは外を見、ヨアキムはイーズの目をちらと見た。五人は黙ったままだった。

静寂のうちに、北の街、マヒトフロイのシンボルの図書館が見えていた。

マヒトフロイは静かな街だった。それを現在待ちと呼べるかは定かではないが。がれきは多くがそのままだった。ただわずかに食料を運ぶための車道があるだけだ。部分的に新しい建物はあるが急ごしらえの雰囲気だった。

「私ーこんな街を写真で見たことがある．．．．お父さんの買ってるワールドフォトっていう．．．こっそり見たの。たくさん人が倒れて、みんなカメラを見てる。希望がないの。明日が来るかは、明日までわからない．．．．。」

エクスがアンの肩に手をおいた。

「レディ・アン。まだあなたには．．．．あなた方には辛いこと。本当ならばこんな光景は見せるべきではなかったかもしれませんが。許してください。」

アンは首を横に振った。一度地面を見た。そして顔を上げた。その顔は先ほどまでの恐れに満ちた顔ではなかった。真実と向き合い、現実を受け入れようとする顔でエクスを見た。

ヨアキムとクリスも同じような顔でその場にいた。エクスは彼らの持ち物がきらりと光ったような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6105d/>

クリスマスを二つ

2011年1月16日02時21分発行